

# I. 諏訪形周辺の古墳群

## 1 はじめに

諏訪形とその周辺には現在、8基の古墳が確認されています。それらは舟窪古墳群（5基）、タタラ塚古墳、森の木古墳（1号墳・2号墳）、上の平古墳ですが、森の木古墳の1号墳は現在、信濃合金株式会社の敷地となっていて、古墳そのものはなくなってしまっているため、残っている古墳は「7基」ということになります。これらの古墳について紹介します。

## 2 舟窪古墳群

### （1）舟窪古墳群とは

「舟窪古墳群」は上田地方における典型的な「群集墳」として、重要な古墳群です。『諏訪形誌』33～35ページには次のように紹介され、続いて各古墳が写真とともに紹介されています。

県道上田・塩川線を須川へ向かう途中にある産業廃棄物処理場右側の林道を、500mほど西側に入った地籍は「扇平」と呼ばれています。この場所はちょうど舟の底のような場所であることから、地元の人たちは「舟窪」と呼んでいます。正式な地籍名は、大字諏訪形字西山です。この地籍の南向きの斜面に、5基の古墳（円墳）がほぼ等高線（標高650～700m）に沿って並んでいます。

「石尊山」通称「三本松」の尾根とその南側の尾根との間に窪地があります。ここは地元で「扇平」または「舟窪」と呼ばれている場所です。この「舟窪」地籍の北側の尾根に、前述のとおり、5基の古墳（円墳）がほぼ等高線に沿って等間隔で並んでいます。

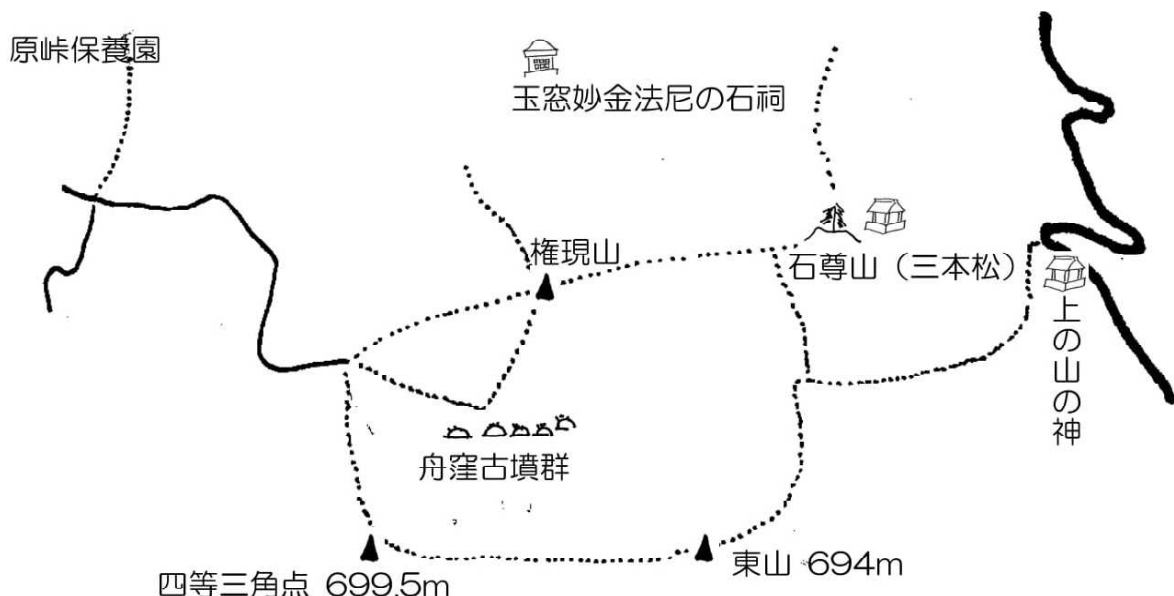
これらの古墳は1974（昭和49）年と1975（昭和50）年に上田女子短大の手によって調査が行われ、西側から第1号古墳、第2号古墳…第5号古墳と命名されています。また、これらの古墳は、石室の形や規模、出土遺物の特徴などから、7世紀後半、古墳時代の終わりの頃の築造と考えられています。

「舟窪」地籍は人里からはやや離れた、狭隘な場所です。このような場所にどこからどうやって古墳を構成する大きな石を数多く運び込むことができたのかはわかりませんが、たいへんな作業だったことは想像できます。それ故に、どのような人の墳墓だったのかということも気にかかることではありますが、「地域の有力者だったのだろう」ということ以外はわかっていません。また、これらの古墳はすべて南向きの斜面に造られていることから、南側の集落（塩田方面）の有力者の墳墓であった可能性が高いと思われます。

### （2）舟窪古墳群の場所

この舟窪一帯はかつては上田藩の御料林だったところで、災害などの時などには工事用として立木を伐採して村々に分配されていました。また、江戸時代から明治初期ころまでは「博打穴」「盗人穴」などと呼ばれていたことから、残念ながらこの時期に古墳の盗掘が進んでしまったものと思われます。なお、「博打穴」の名前の由来は、この古墳の中に隠れて、禁止されている賭博を行う者がいたため、と言われています。

## 舟窪古墳群周辺概念図



前述の『諏訪形誌』33ページでは「県道上田・塩川線須川へ向かう途中にある産業廃棄物処理場右側の林道を500メートルくらい入った地籍」と紹介されています。以前から県道上田塩川線沿い「上の山の神」のすぐ下から沢沿いに「舟窪」に入り、原峠方面に抜けていくことは可能でしたが、道はかなり荒れていて、特に夏場は背の高い草に覆われ、入っていくことはかなり困難でした。しかし、後から述べるように「ナチュラリストクラブ・うえた」の皆さんなどの活動で、新たなコースが整備され、たいへん歩きやすくなっています。

御所のセブンイレブン前の信号から南に急坂（旧道）を上り、原峠保養園の門の前から南東寄りの山道に入るとさらにしばらく上ると「原峠」に出ます。ここに右の写真の「舟窪古墳群まで800m」の掲示があり、それにしたがって林道を東に進みます。余談ですが、この場所が「御所の一丁目一番地である」と書かれた案内板があります。



峠の道標

ここから約700mほどの坂道を登り切ると、小尾根に出ます。トレッキングコースはここから南側の尾根に続いています。この場所に「舟窪古墳群100m」の小さな掲示があります。その表示にしたがってやや下り気味に少し東に進むと、左側（北側）の斜面に「舟窪古墳群」の標柱と案内板があります。前述の「上の山の神」から「尾根分岐」までは1kmほどです。

なお、通称「殺人坂」を上ってそのまま直進して、ボーイスカウトのキャンプ場前を過ぎ、少し上ったところに西に向かう林道があります。この道をたどっていくと御所のセブンイレブンから上ってくる道と合流し、ここを左に折れると原峠保養園の正門前に出ます。気持ちの良い山道で、散歩している人も見られます。また、舟窪古墳群や石尊山、東山付近の遊歩道は「ナチュラリストクラブ・うえた」の皆さんによって整備が進められており、たいへん歩きやすくなっています。

### （3）舟窪古墳群の現状

「舟窪古墳群」の古墳には前述のとおり、西側から番号がふられていて、第1号古墳と第2号古墳の間に、右の写真のような上田市教育委員会による標柱と案内板が設置されています。



#### ①第1号古墳

古墳群の西端に築かれていて、1974（昭和49）年に上田女子短期大学によって発掘調査が行われました。規模は東西9.5m、南北10.5m、高さ1.5～3.5m、両袖型の横穴式で、玄室の天井石が一枚なくなっていて羨道の天井石が崩落していた以外、保存状態は良好のようでした。玄室内からはメノウ製の勾玉（まがたま）8個、水晶製切り子玉8個が出土しました。また、土師器、須恵器の椀や壺の破片などと、取手が付いた坏蓋（つきぶた）1個も見つかっています。

棺を納める玄室は奥行2.5m、幅1.4mで、基礎には自然石の平石（ひらいし）を用いています。また、その上部には自然石を小口積みになっています（一部「上田市マルチメディアセンター」の資料による）。



#### ②第2号古墳

第1号古墳から東側約15mの場所に第2号古墳があります。土盛の円墳で、その規模は東西南北とも直径10m、高さ1.0～3.3mで、第1号古墳とほぼ同じといえます。石室は両袖型の横穴式です。この古墳も1975（昭和50）年に、上田女子短期大学によって発掘調査が行われました。

第2号古墳が第1号古墳と異なる点は、羨門（せんもん）の手前におよそ1.6m四方の前庭部を持っていることです。「羨門」とは、お墓の前で祭祀をするための施設で、全国的多くの古墳に見られますが、上田地方には例のない貴重なものとされています。残念ながら盗掘の被害を受けていて、出土遺物は土師器などが数点あっただけです。

### ③第3号古墳～第5号古墳

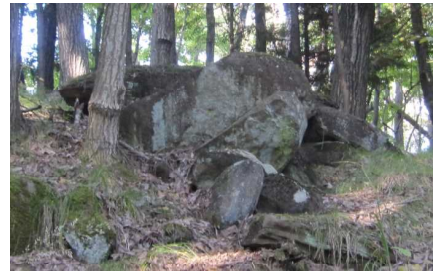
第2号古墳の東側約18mほど離れた場所に第3号墳、さらに東へ第4号古墳、第5号古墳と続いています。3つの古墳とも発掘調査はされていないのですが、天井石が失われていて、石室内部は見る事ができます。第4号古墳は特に傷みが激しく、その構造がはっきりしません。



第3号古墳



第4号古墳



第5号古墳

## 3 タタラ塚古墳

「タタラ塚古墳」は、県道上田・塩川線沿いの悠生寮入り口付近、標高約540mの場所にある古墳で、昭和63（1988）年に上田市指定記念物（史跡）に指定されています。「タタラ（鑪）」とは、鋳物師などが用いる、空気を送るための足踏み式大型ふいごのことですが、この古墳になぜそのような名前がつけられたのかについてはわかりません。

タタラ塚古墳は南北約9m、東西約7mの大きさで、北側の高さは約2.2mの円墳です。また、羨道（横穴式古墳で玄室と外部とを結ぶための通路）は、南西方向に羨道口を持っています。羨道口部分は土砂の崩落により崩れていて、羨道部分の天井石が1枚残るのみです。また、玄室（遺体を納める室）部分は奥壁の幅約1.1m、高さは約1mの大きさで、天井石は失われていて、玄室の内部を見ることができます。盗掘にあっており、出土品についてはわかりません。いずれにしてもこの地域の有力な豪族の墓と考えられ、重要な古墳とされています。



## 4 森の木古墳

### （1）森の木1号古墳

森の木1号古墳は金窓寺の西側、現在の信濃合金株式会社の敷地内にありました。地域の方（昭和初期の生まれの方）の話だと「子どものころは古墳に上って遊んでいた」とのことですが、現在ではまったく残っていません。

この古墳は大正15（1926）年に県道上田・塩川線が拡幅されたときに発掘調査が行われました。その結果、古墳時代末期の塚と考えられる鉄刀3本、銅環1個、馬具の残欠などが見つかりました。その中で、鉄刀の1本は刀身が1m以上もあり、これまでに上小地域で出土した刀の中では最も長いものです。この鉄刀は現在、信濃国分寺資料館に展示されています。



森の木1号古墳のあった場所は  
現在は信濃合金(株)の敷地内



## (2) 森の木2号古墳

森の木2号古墳は昭和26(1951)年、六ヶ村堰の改良工事が行われた時に発見されました。この古墳は古墳時代末期の横穴式円墳とみられており、羨道入口は南東方向と考えられています。現在は、市道国分・川辺町線(小牧バイパス)諏訪形信号の北側、増澤弘さん宅の北側に大きな天井石3個が露出しているのみで、それ以外はすべて埋没しています。この場所は以前、六ヶ村堰が通っていた場所のすぐ脇で、まだ未調査ですが、盗掘の痕跡がないことから貴重な発見も期待できます。発掘調査が待たれます。



## 5 上の平古墳

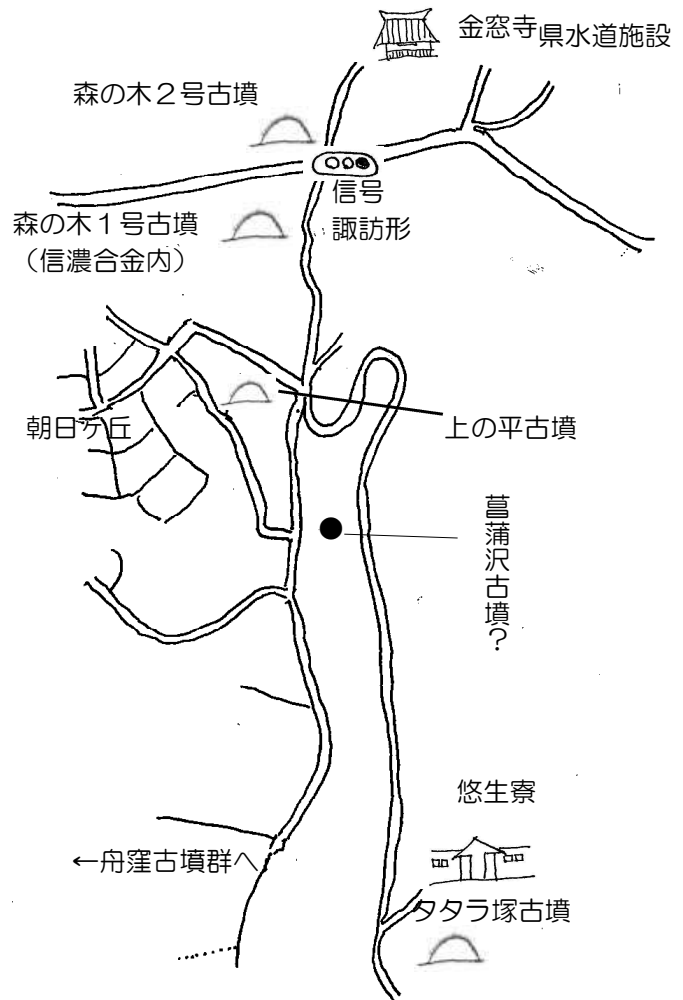
上の平(うえのひら)古墳は、県道上田・塩川線の「朝日ヶ丘東口」から西へ、坂道を200mほど上がった、朝日ヶ丘東端台地の畑の片隅にあり、古墳の周囲は住宅化されています。昭和40(1965)年8月、長野県上田高等学校歴史班が日本考古学会会員五十嵐幹雄の指導の下で発掘調査を行いました。

古墳は直径7.2m、高さ2.8mで、石室内は半載徳利型の積石塚です。残念ながら石室内は盗掘の被害を受けており、だいぶ荒れた状態でした。この古墳からの出土品は石製勾玉1個、水晶製臼玉1個、ガラス小玉2点、鉄製刀子(小刀)3点、金環2点でした。また、人骨片も見つかっています。

上の平古墳東側の畑の畔などには、大きな石がいくつも散在していることから、かつてこの場所にも古墳があったのではないかと考えられています。



上の写真のように、現在の上の平古墳は住宅地の中で一見、古墳には見えない状態ですが、草がないと下の写真のような状態です。



## 6 菅蒲沢古墳

右図の「●」付近に「菅蒲沢古墳」があった、と記述されている資料があり、以前はこの場所に古墳があったものと思われますが、現在は存在しないようです。

このような失われてしまった古墳も数多いことと思われます。